

どものかぎられた視野は現在を超えて遠くまで進むことができないので、約束をしながら子どもには自分がしていることを本当にはわかっていない、というのが実態だからである。「将来にたいする約束をするとき、子どもはなに一つ約束しているわけではない。そしてまだ眠っているかれの想像力は、二つの異なる時期にかれの存在をひろげることにはできない」²⁸⁾とルソーは述べている。

つぎに第三点目としてこの時期の子どもにたいしておこなってもあまり意味のないこととしてルソーがあげている外国語教育について見ておこう。ルソーはそうした教育の無意味な理由としてことばはすぐれて文化であるが、この時期の子どもにはさしあたり一つの文化しか受け容れることができないからだ、としている。「言語の勉強がことばを学ぶこと、つまり、それをあらわす文字や音を学ぶことにすぎないなら、そういう勉強は子どもにふさわしいかもしれないとわたしはみとめよう。しかし言語は、記号を変えることによって同時にそれが表現する観念を変える。頭脳は言語に即して形づくられ、思想は慣用の語法の色合いをおびる。理性だけは共通のものだが、それぞれの国語によって精神は特殊の形態をもつ。……

そのいろいろな形態の一つを習慣が子どもにあたえる。そしてこの唯一の形態を子どもは理性の時期にいたるまでもちつづける。二つの形態をもつためには、観念を比較することができなければならないが、観念をもつ能力がほとんどない子どもにどうしてそれを比較することができよう」²⁹⁾とルソーは言うのである。

最後にこのように体育をもっぱら重視し、知育のほうはできるだけ遅らせるという教育法の利点として子どもの天分を見つけやすくなるということを指摘しているところを引いておこう。「この方法の有効性を確証するもう一つの点は子どもの個別的な天分にたいする配慮ということである。子どもにどのような精神的な手当がふさわしいのかを知るためにはその天分を十分に知っておかな

ければならない。精神にはそれぞれに固有の形があって、それに合わせて導かれなければならないのだ。そしてあたえられる配慮の成功いかんは精神がほかの形によってではなく、その形によって教育されることにかかっているのだ。慎重な人よ、長い時間をかけて自然をうかがっているがよい。最初のことばを話しかける前にあなたの生徒をよく観察するがよい。まず生徒の性格の芽ののびのびと姿を現してくるがままにしておくがよい。性格の全体をよりよく観察するためにはいかなる点においてであろうとそれに逆らうようなことはしないように。この自由な時間が子どもにとって無駄に過ごされたとお考えになるであろうか。まったく反対に時間はもっとも正しく用いられたことになるのだ。なぜならこのようにしてより大切な時期に一瞬たりとも無駄にしないことをあなたは学ぶことになるのであるから」³⁰⁾。

三、12歳～15歳

ルソーはこの時期の子どもを人生におけるもっとも幸福な時期にいるものとして位置づける。なぜなら先にも見たようにルソーは人間の幸福というものはその力と欲望のバランスにある、とするのであるが、「望むことよりもより多くのことができる」³¹⁾ 唯一の例外的な状態にある存在がこの時期の子どもであるからである。もっとも、食生活の変化により子どもの成長の時期が早くなり、また子どもを取り巻く環境も比較にならないほど変化を遂げてしまっている昨今の状況からすると、いかにエミールのような例外的な環境を想定するにしても多少この時期はもう少し早めに考えるほうが自然なのかもしれない。すくなくとも十五歳の子どもも含めて「この時期は青年期には近づいているが、まだ思春期には達していない」³²⁾ などという言い方は今日ではもう不可能なのではなかろうか。とはいえルソーがいうように子どもが絶対的にもっとも大きな力をもつ時期で

28) Ibid., p. 336

29) Ibid., p. 346

30) Ibid., p. 324

31) Ibid., p. 426

32) Ibid., p. 426